

# イヌの仇討

(井上ひさし全志同士の五所収新編社)

こまつ座 第144回公演

井上ひさし 作

東憲司 演出



大谷 亮介  
彩吹 真央  
俵木 藤汰  
田鍋 謙一郎  
石原 由宇  
大手 忍  
尾身 美詞  
薄平 広樹  
原口 健太郎  
三田 和代



音楽 宇野誠一郎  
美術 石井強司  
照明 小沢 淳  
音響 森 大介  
衣裳 中村 洋一  
所作指導 花柳 けい  
宣伝美術 安野 光雅  
演出助手 宮田 清香  
舞台監督 白石 英輔  
制作総括 井上 麻矢

# イヌの仇討

井上ひさし作  
東憲司 演出

小沢 淳

時代が遺すは事実か真実か。

吉良上野介、赤穂浪士、忠臣蔵…正義も悪も、

世の中が変われば見方も変わる。

歴史のからくりと人間のドラマが交錯する、

現代をも鋭く切り取る物語が東憲司の手で再々演。

2020年度 文部科学大臣賞・  
日本照明家協会賞 大賞 受賞

討ち入り当日、密室でお犬様と炭焼き小屋に隠れていた吉良上野介はどんな思いで首をはねられるまでの二時間を過ごしたのか。吉良の目線から、その知的な興味を駆使して語られるスリリングな舞台運びは、忠臣蔵のもう一つの側面を浮かび上がらせる。大石内蔵助が登場しない「忠臣蔵」が描き出すものは何か。三百年余の時を超え、今なお真実を問い続ける井上ひさし版「忠臣蔵」異聞。

時は元禄十五年（一七〇二）

十二月十五日の七ツ時分（午前四時頃）。

有明の月も凍る寒空を、裂帛の気合、不気味な悲鳴、そして刃に刃のふつかる鋭い金属音が駆け抜ける。大石内蔵助以下赤穂の家来衆が、ついに吉良邸内に討ち入った。狙う仇はただ一人。

「吉良上野介義典」

上野介は、家来、側室、御女中たちと御勝手台所の物置の中に逃げ込んでいた。赤穂の家来が邸内を二時間にわたって、三度も家探ししていた間、身を潜めていたというあの物置部屋で、彼らの心に何が起こったのか。

——討ち入りから三百年、歴史の死角の中で眠っていた物語は三度動き出す。



思えば、あの白髪の品のいい老人が気の毒でならぬ。ある日、些細なことを根にもたれ、いきなり切りつけられたばかりか、あげ句の果てには殺されて、壮大な貴種流離譚のために、三百年間、悪く言われ放しのある老人を、私はときどき手を合わせて拝みたくなる。

——井上ひさし

これは愛と犠牲の物語である。忠臣蔵の仇役、吉良上野介とその家臣たちに光を当てた異色作である。井上ひさし版忠臣蔵には浅野内匠頭も大石内蔵助も出てこない。主人公の白髪の老人は家臣を思い、忠義を重んじた。家臣たちも主人公を守ろうと必死に戦う。討ち入れ逃げ込んだ物置の中で、登場人物たちはもがき苦しむ。作者は権力に忠実なイヌとして生きてきた老人を慈しみながらも、滑稽に笑い飛ばし、厳しく残酷に打ちのめす。生と死と、喜劇と悲劇が絶妙に混じり合い、観客の心を掴んでゆく。

——東憲司

## ～九演連の皆様～

今こそ諸説が語られるようになった「忠臣蔵」の物語。これを井上ひさしが書いた時には吉良は悪者、そして大石内蔵助四十七士は赤穂の忠義者でした。いかにも悪そうな吉良上野介は100年以上もの間ずっと悪役でした。それはなぜでしょう。悪役になっても時の政府の裏切りの陰謀を世に伝えるために立ち上がったダークヒーロー、それがこの作品の主役です。吉良上野介の討ち入り当日、身を隠すところから始まる臨場感たっぷりの舞台をお届けすることができます。本当に大切な事が隠されたまま歴史が積み重なっていかないように、今こそこの作品を届けます。

——こまつ座 井上麻矢

## ～ 暮らしの中に演劇を ～ 宮崎市民劇場 第182回例会

2022年12月6日(火) 開演18:30 (開場18:00)

会場：メディキット県民文化センター (県立芸術劇場 演劇ホール)

定期的に演劇を鑑賞する「会員制」の団体です。一年は観続けましょう。

(大人) 入会金 / 月会費 2500円 (学生) 入会金 / 月会費 1500円

問い合わせ 〒880-0805 宮崎市橋通東3-3-8 カプトビル3F 0985-62-0075